



上
昌広
NPO法人医療ガバナンス研究所
理事長



かみ・まさひろ。1968年兵庫県生まれ。東京大学医学部卒業、93年東京大学医学部附属病院内科研修医、95年都立駒込病院血液内科医員、99年東京大学大学院医学系研究科修了。虎の門病院血液内科医員、国立がんセンター中央病院薬物療法医員などを経て10年7月より東大医科学研究所特任教授。16年4月から現職。

神戸の医療体制と播磨の関係

3月7日、神戸を訪問した。前田裕斗君の送別会に参加するためだ。主催してくれたのは平井昭博氏。白陵高校から広島大学に進み、神戸市内で開業している。3年前、私が平井氏に前田君を紹介した。

前田君は開成高校から東大医学部を卒業した産婦人科医だ。学生時代から指導している。川崎市内の病院で初期研修を終え、神戸市立医療センター中央市民病院に後期研修医として就職した。研修を終え、4月から東京に戻ってくる。

私は平素より「出身地と出身大学以外で修業するように」と指導している。異郷で働くことで、若者は成長するからだ。神戸で働き、彼は兵庫県の医療提供体制の貧弱さに驚いたようだ。特に問題なのは播磨地区だ。「遠く姫路からポートアイランドまで急患が運ばれてくることもありました」という。その距離60キロメートルだ。なぜ、こんなことになるのだろうか。それは播磨の歴史が関係する。

播磨の中心は姫路だ。江戸時代まで姫路は大都市だった。幕末の推定人口は2万4000人。兵庫・神戸の2万2000人や岡山の2万人を凌ぐ。当時、姫路を治めたのは徳川譜代筆頭の酒井家本家（雅楽頭家）だ。幕末の君主忠績は最後の老を務め、維新の志士を弾圧した。

明治維新以降、明治4年11月2日にできた姫路県は、1週間後の11月9日に飾磨県に改称され、明治9年には神戸を中心とした兵庫県に吸収された。当時、姫路の教育レベルは高かった。

ところが明治以来、姫路は冷遇され続けた。戦前、この地域の高等教育機関は旧制姫路高校だった。大正12年、国内で最後に開設された旧制官立高校だ。戦後、多くの旧制高校が大学に昇格する中、1950年、新制神戸大学に吸収される形で廃校になる。現在、姫路には総合大学、医学部はない。人口当たりの医師数は開発途上国なみだ。

地域力は結局、人材力だ。衰退する

姫路を復興させようとした人物がいる。三木省吾氏だ。三木氏は旧制姫路高校から京都帝大に進んだ教育者だ。1963年、私財をなげうち、白陵中学・高校を立ち上げた。白陵とは旧制姫路高校の寮のことで、白鷺城に由来する。

同校からは千葉市長の熊谷俊人氏や京都大学から千葉ロッテに入団した田中英祐氏などが出ている。三木氏の熱意あふれる指導ぶりについては、白陵高校OBの渡辺啓二氏の「私と母校白陵中学校白陵高等学校と三木園長先生」(MRIC, 2015, vol.69)をお読みいただきたい。

白陵高校は優秀な教師の獲得に力を注いだ。その1人が前校長の斉藤興哉氏だ。私もお会いしたことがあるが、熱意ある教育者だ。神戸高校校長を経て白陵高校に赴任した。実は、彼は山形県鶴岡市出身だ。鶴岡と姫路には縁がある。いずれも酒井家の本家が治めたのだ。戊辰の役が終わると鶴岡も干された。明治9年に鶴岡県は山形県に合併され、旧制山形高校は山形市内に設立される。鶴岡市内の県立農林専門学校を前身とする山形大学農学部以外にめばしい高等教育機関はなかった。この地は高等教育機関を求め続けた。そして、2001年、慶応大学を誘致し、鶴岡タウンキャンパスが立ち上がった。今や先端生命科学研究をリードする組織に成長した。

話を斉藤氏に戻そう。私は、彼が姫路で活躍していることには、庄内藩と姫路藩の縁を感じずにいられない。幕末を代表する両藩が重視したのは独自の教育、人材育成だったからだ。この伝統は斉藤氏の中で生きている。彼は官におもねることなく、地道に人材を育成し続けた。このあたり、冒頭に紹介した平井氏にも通じる。そのうち東京に戻ると分かっている前田君を支え続けてくれた。前田君は大きな影響を受けた。前田君はやがて日本のリーダーとなるだろう。衰退する日本をどうするか。神戸で出会った人たちとの交流が彼の財産になるはずだ。